

かけはし

発行：峡南教育事務所地域教育支援担当

所在地：南巨摩郡富士川町鯉沢 771-2

TEL：0556-22-8154

FAX：0556-22-8144

HPでもご覧になれます URL：<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-mk/index.html>



平成25年度「子育て学習会」開催

峡南地域教育推進連絡協議会・峡南教育事務所主催の「平成25年度 子育て学習会」が、峡南地域を南北2地域に分けてそれぞれ開催されました。どちらの学習会も平日の夜7時30分からという時間帯でしたがともに多くの方の参加をいただくことができ、いずれも予定された時間を超過するようないへん熱意あふれる学習会になりました。参加者からは「もっともっとお話をうかがいたかった」という声が多く聞かれました。



北ブロックでは、2月6日に富士川町かじかざわ児童センターにおいて、山梨県立大学人間福祉学部保育学講師・元山梨県福祉保健部保健監の新藤京子氏を招いて行われました。長年にわたって県の保健師として健康保健業務にあたるとともに看護師養成教育にも携わってきた新藤氏は、退職後も母子保健の立場から生命と子どもを大切に育むことを訴えた「生命の授業」の講演活動を行うとともに、母子愛育活動などの支援を通じて少子化対策を進めるなど精力的に活躍しています。

この日の「子どもは誰が育てる？」と題された講演は、人間が誕生し成長していく中で欠かすことのできない重要な事からは何かということをあらためて考えさせられるものでした。まず、日本の社会では生まれてから新生児、乳幼児小中学生、高校大学生と成長していく中で、それを取り巻き支え育てていく人々や社会が、親、家庭、幼稚園保育園、学校のほか、母子愛育会、社会福祉協議会、育成会、近隣地域社会、行政などきわめて多岐にわたってきたことを指摘、その一方で現状では出生率の低下、家族や地域社会の関係性の変化、産業構造や就労形態の変化など、子どもを育てる力が低下し、子どもの不登校や非行、いじめの問題、成人した後も晩婚化や育児不安、虐待、過干渉など、いずれも課題のある状態を招いていることを説明しました。こうした状況に行政も様々な施策を講じているが、それが効果を上げるためには地域が積極的に施策を取り入れ、より多くの人々が子育てに関わることが不可欠であることを強調しました。次に生命の循環や子どもの人格形成の要素について話が進み、「よき出生」から「よき死」に至るサイクルにおいて

「人と人の関わりから人間が育つ」という重要な事実にあらためて気づくこと、子どもには「愛すること、人の役に立つよろこび、責任」という3つの力を伝えたいこと、子どもの心身の成長が健康であるためには親の果たす役割が非常に大きいこと、ただしそれには「母親をあたかく包み込む多くの人々」の存在が不可欠であることなどが、講師自身の大きな人生観をもとに語られました。最後に、持参した大きな鞆から胎児から赤ちゃんまでの数体の人形が取り出されました。これは「生命の授業」で用いるもので、誰もが人間として歩み出してきたその様子を見事に示してくれるものです。人形を愛おしそうに抱いて語る新藤氏に対して、参加者からは深い感動の声が漏れました。



北ブロックの翌週、2月13日には南ブロックの学習会が、身延町総合文化会館で開催されました。

講師は、山梨大学保健管理センターの臨床心理士である伊藤美佳氏で、県内の小中学校をはじめ様々な機関で長年にわたり臨床心理士として活躍しており、その経験をもとに、「子どもと向き合う／自分と向き合う」というタイトルのもと、参加者との対話を交えながらの学習会が展開されました。

忙しい日常生活と子育ての中でついおろそかになりがちな、「相手の心」をいかにくみ取り言葉だけではない豊かな心のつながりを保つことができるか、また子どもの成長において確かな「安心感」や「自己肯定感」「自尊感情」を身につけることがいかに大切なことかなどについて、具体的な事例を示しながら参加者とともに考える講演となりました。

「人は生まれながらに口の中に斧を持つ」という釈

迦の言葉からは、私たちは言葉で人を傷つけると同時に自らも傷つくことを指摘し、自己否定感や否定的思考の悪循環をなくすような冷静なコミュニケーションの重要性が強調されました。そしてお互いの気持ちを大事にして子どもに向かい合うことで豊かな心の発達をうながすことができると指摘し、そのために、大人が子どもの発達段階にともなう心の成長の様子を正しく理解することや「**困った行動をする子は、実は本人も困っている**」ことを念頭に感情的行動である「怒り」と修正的指導としての「叱る」ことの違いをふまえた正しい対応をすること、こどもの「SOSサイン」を正しく察知することなどがまず何より大切なのだということにつ

いて、参加者とともに具体的に考えながら進められました。最後にストレス対処法(気分転換として、身体を動かす・好きなことをする・コミュニケーションをはかる・リラックスする・エネルギーを補給するなど)が紹介されるとともに、「イライラ・ムカツク気持ちとのつきあい方」というワークシートが配られ、実は「怒り」そのものも自分を守る大切な感情であり、否定して押しつぶすのではなく、それを冷静にとらえてうまく緩和する方法についても学ぶ必要がある、と説明されました。伊藤氏の柔らかい口調と人に対する温かい思いやりの言葉に、日頃の自分と子どもの関わりをもう一度考え直すきっかけになったという参加者の言葉が印象的でした。

実践的防災教育推進事業 成果発表会

下部小学校・下部中学校

主体的な判断力と行動力を



1月28日に南アルプス市の桃源文化会館で行われた、平成25年度の「実践的防災教育推進事業成果発表会」において、身延町立下部小学校・下部中学校の取組事例の発表があり、予想される地震などに備えた喫緊の課題となる防災教育や防災指導において、新たな課題が明らかになったこととそれを踏まえたより有効な指導や教育のあり方についての報告がなされました。

事例発表に立った下部中学校の橋田清校長は、課題を明らかにするために学校の休み時間帯に事前予告なしで避難訓練を行ったところ、多くの児童生徒がわざわざ自分の教室に戻り自分の机の下に身を隠すという行動をとったこと、中には緊急地震速報受信システムの警戒音に驚いてしまい、避難行動そのもの

がとれない子どもがいたこと、避難行動をとる子どもが他の子どもの言動に左右されやすいことなどの問題点が浮かび上がってきたと紹介。決められた画一的な指導による避難方法だけでは、いざというときに本当の安全確保につながるか危ぶまれる結果につながったと指摘しました。さらに訓練後には防災アドバイザーとして招いている秦康範山梨大学准教授から指導助言を得るとともに、児童生徒が参加する防災学習会をもって、速報から実際の地震発生までの間にどのような行動を取るべきか「自分で考えること」の大切さを学んだそうです。

このほか「防災ボランティア」の意義、地域や保護者との連携による防災教育の実践、災害凶上訓練(DIG)による自らの地域の特性理解など多岐にわたった成果が報告されました。

発表で示された災害発生時に必要な 「自分で考える」防災行動の例

- 窓ガラスやロッカーなど危険物から離れる
- 安全ならば無理に教室には戻らない
- 普段から避難方法を考えておく
- 家庭でも防災について話し合っておく



ことぶき勸学院短信

山梨ことぶき勸学院の平成25年度の卒業式が、3月12日に甲府市のコラニー文化ホールにて行われました。学院の体制が改められて初めて迎えた卒業式として、200人を超える方々がこの日を迎え、峡南教室からは卒業生30人が出席、卒業証書を受け取るとともに仲間と過ごした日々や2年間学んだこれまでの取り組みを振り返る一日となりました。

式では、6つの教室ごとに代表者が卒業証書を受け取り、次いで皆勤賞授与が行われました。このあと瀧田武彦学院長から卒業する方々に対し、高い意欲への敬意、努力へのねぎらい、卒業後の活躍への期待と教室にも訪れてほしいとの親愛の情あふれる内容の式辞が述べられました。

式典後の当日午後には、もと中学校教師で、事故による全身麻痺を乗り越えた上で生きることの尊さを訴える活動を展開している、腰塚勇人氏による「命の授業」と題された記

平成25年度 勸学院卒業式

念講演と、異世代交流として、東京ディズニーランドにおける活躍でも知られている城北幼稚園(甲府市)の園児によるマーチングバンド演奏が行われ、卒業のお祝いに花を添えていました。



大雪にだって負けないぞ！ みんなでふるさとを学ぶ取り組み

早川北小学校(一瀬純司校長)では、3月5日の授業参観の際に、子どもたちが地域について調べたことを発表する機会をもちました。3年生(在籍3人)は、それぞれが住んでいる地域のことや家族のことについて考え、「奈良田地区について」「お母さんが勤めている店にある町の特産品について」「黒桂(つづら)地区について」の3つのテーマに関して協力して調べることにしました。早川町出身で担任の望月里香教諭は、地域や家族のことから興味を広げて、1年間調べて行くことで地元のことをより好きになり、地域に誇りをもてるようになってほしいという願いをもって指導に当たってきたそうです。

テーマ① 「奈良田ことばの紙芝居」

同校は、「奈良田ことば」など地域の文化を取り入れた民話劇に取り組んで今年で41年目になります。こうした中で3年生の3人は奈良田の方言に強く惹かれ、ネット(奈良田ことば番付等)や本、直接に奈良田地区の住民に聞いて調べました。奈良田で使われる方言は、甲州弁とも違い奈良田地区だけで使われていることばで、特になまりやアクセントに特徴があります。児童達は、「いんめい(しばらく)休もうかな」「鬼ごっこでちゅちゅうど(いそいで)逃げる」「雨の日に遊ぶと、ひとひょうけ(びしょ濡れ)になる」…多くの奈良田ことばを覚え、実際に使ってみたりもしました。

単語調べをしていくうちに、「この言葉は、奈良田ことばになるよ」…多くの単語がグリム童話「ブレーメンの音楽隊」のことばに置き換えられることに気づき、「奈良田ことば」でこの紙芝居を行いたいと考えました。奈良田地区の深沢實さんに言葉の置き換えや全体調整、ことばのイントネーション、アクセントの指導をお願いしました。紙芝居の絵は、自分達で鉛筆や絵の具で描きました。この紙芝居では、しゃーだ(仕事)・ていない(てっぺん)・かあとるまい(肩車)・びくしょい(小度胸)・ひっちまい(終わり)など28の「奈良田ことば」が使われ、3月5日の授業参観では元気な大きな声で保護者に発表していました。

児童は、「ブレーメンの音楽隊に出てくる人物の気持ちを考えながら発表しました。奈良田の方言は使い方や発

音が難しいので気をつけました」と語っていました。発表後に保護者からも「とてもすばらしい発表でした。方言の学習発表や紙芝居がとても良かった」と感想がありました。

紙芝居の発表は、1月にも朝の活動で全校に発表し、2回目となる今回は、お世話になった奈良田地区の方を招待していましたが、大雪の影響で来られなかったので3回目の発表を3月末に奈良田公民館で行う予定になっています。



テーマ② 「町の特産品パンフレット」

6月の社会科での町内めぐりで、南アルプスふるさと活性化財団を訪問し、県内産の豚肉を使用し丁寧に熟成させるハムづくりや味わい深いみそづくりを見学しました。また、それまで見たことがなかったこんにやく作りにも興味を持ち、原料のこんにやく芋について本などから学んだ上で、1月にこんにやく作りを直接学ぶ機会を得ました。

これらの経験から、郷土の3つの特産品について学びそのつくり方や紹介ができるようになったことから、「早川町の特産品パンフレット」を作ろうということになりました。担任が用意した原稿枠に、自分達で考えた文章と写真を載せてできあがったのが『町の特産品パンフレット』です。A3版両面で、美しいカラー印刷で仕上げました。子ども達の希望もあり、今後このパンフレットは町の直売所に置かせてもらったり、イベントで活用してもらおうことになりました。3月の授業参観では、特産品についての調べ学習の成果を発表して、保護者にパンフレットをプレゼントしました。

シリーズ『峡南地域の祭事探訪』(26) ～早川町・黒桂地区の「デク転がし」～

今回の「祭事探訪」は、早川北小の皆さんが取り組んだ成果をご紹介します。

テーマ③ 黒桂(つづら)地区に伝わる「デク転がし」

黒桂地区には「デク転がし」という不思議な風習があります。早川北小の3年生はこれにも興味をもち取り組んでみることにしました。まず町で発行している資料をもとに自分達で調べ、疑問点について黒桂の住民に質問を重ねました。

昔この集落ではやり病が広がって病気の根がなかなか切れず、多くの子どもが命を落としました。集落の人は、「なんとかしねえと、子どもん、絶えちもうわ」ということで、それには道祖神様の力を借りるのが一番ということになり、「デク転がし」が始まりました。道祖神は、本来は悪魔はらいの神です。丸太の「デク」に姿を移した神様にその使いの子ども達が顔に墨でひげをつけて、厄除けやお祓いをしてほしい家に行き、「デク」を座敷中に転がしてまわるので、疫病神も貧乏神もたまたま逃げ出してしまいその家が安泰になるのだそうです。

悪魔はらいは、荒っぼい神様にお出まし願って、暴れまくって追い出してもらいます。この荒っぼい神様の顔を描いた「デク」を、座敷中転がしてまわる行事を残しているのは現在は黒桂地区だけなのだそうです。

学んでいく中で、杉の木に顔を描くことやその顔にはみ

な意味があること、昔は男の子だけでやっていたこと、「祝ってくりょー」「もつくりょー」といって家々をまわっていたことなどを知ることができました。子ども達は調べていくうちに次第に「デク」に愛着を抱くようになり、学習のまとめとしてミニデクのストラップを作り、魔除けの顔を描いたり、願い事を書いたりしました。感想で子ども達は、「デク転がしは、昔はやってたけど今はやっていない。デク転がしをやっていることが想像できるようになったけど、実際にデク転がしをやったことがないからやってみたい。復活してほしい」と話していました。



3月の授業参観では調べた成果を発表し、作ったミニデクを保護者にプレゼントしました。

物作りの楽しさを伝えたい！

オリジナル錫コースター作り

スズ
峡南高校

記録的な降雪に見舞われた今年の2月。その2月の最終日曜日23日は、語呂合わせで「富士山の日」でした。例年、県内各地でこれにちなんだイベントが行われますが、今年は大雪の影響で中止されるものが相次ぎました。そうした中、身延町の湯之奥金山博物館では県立峡南高校との共催で「富士山のキーホルダー作り体験教室」が開催されました。

これはメイン行事の「オリジナル錫コースター作り」と同時に行われたもので、このコースター作りはもともと峡南高校が日頃の学習成果を地域の活性化につなげる趣旨のもと博物館との共催で5年前から行ってきたものです。錫(スズ)は、融点が低く(232℃、金・銀・銅はいずれも1000℃前後、鉄は1500℃以上)、無害で抗菌性に優れるとともに錆や腐食に強いいため、昔から生活の中で銀に次ぐ高級食器素材として用いられてきた金属で、近年インテリアやアクセサリーとしてもおなじみです。峡南高校では工業基礎の金属加工に関する授業においてこの錫の加工に取り組み、その成果を学校の外へ発信してきました。昨年、ぴゅあ峡南(南部町)でも開催して好評を得たほか、東京ビッグサイトの「インターナショナルアートイベントデザインフェスタ」にもブースを出し、大変注目を集めました。

2月23日には午前と午後の2回にわたってコースター作りが進められ、あらかじめ予約してコースターの絵柄を考えてきた親子連れなどが集まりました。まず、自分のデザインした絵柄をケント紙で切り抜いて型枠にあてはめ、これを耐火煉瓦で挟んだところへ鍋で溶

かした錫を流し込みます。これが冷えたら型枠から取り外し、余分なところを切り取ったり削ったりして、仕上げに裏側にフェルトを張れば自分だけのコースターができあがりです。同じ錫で同じ要領によって作る「富士山キーホルダー」は、予約なしでできるということで、博物館を訪れた家族らが挑戦していました。

今回初めて参加するクラフト科(今年度新設学科)の1年生の中には、高校生として全国的にも数少ない技能検定3級(貴金属装身具製作)に今春合格したスーパー高校生2名もいて、「将来、貴金属業に携わりたい、学校生活がとても充実している」と目を輝かせて取り組んでいました。また、「おもてなし」の実践ということで同校最後となる情報ビジネス科の生徒や、写真撮影担当のマルチメディア部の生徒らが支援のため参加し、イベントを盛り上げていました。



地域と学校の連携を深めることの必要性



2月28日に市川三郷町総合福祉センターで山梨県町村教育長会の研修会が開かれ、山梨県立大学理事の五味武彦氏を招いて「これからの学校教育の目指すもの～地域社会の連携と課題～」と題する講演が行われました。五味氏のもと県立市川高校長として野球部の甲子園出場

を率いた経験を持っており、峡南地域にも深い思い入れがあるという前置きを語りながら講演が始まりました。

講演では、人が遺伝のみならず環境によっても形質や発達の様子が変化する可能性についてまず触れ、人の成長に大切な3つの環境の観点について話が進められました。一つ目は生涯学習の現状に関してで、青少年の育成団体(ボーイスカウト・ガールスカウト・スポーツ少年団・子どもクラブ・緑の少年隊など)の活動が全体的に弱まっていることと社会人の学習の場としては放送大学・諸大学のリカレント機関・ことぶき勸学院・山梨学びネットなどが整えられてきていることを述べました。加えてラジオ体操など地域の結びつきによる活動をあげて地域社会には多様な可能性があるにもかかわらず、少子化や自治会役員

町村教育長会研修会 五味武彦 県立大学理事講演会

の高齢化・育成会の停滞・子育て世代の孤立化・車社会の弊害など、様々な問題も目立ってきていると指摘しました。この中でかつての山梨県民の実態(昭和30年代調査)について触れ、排他的・妬み嫉みを持つ・粗野な言語・社交下手といったよくない面のほか、負けず嫌いな勤勉性・忍耐強さ・義侠心に富む・素朴で義理堅いなどのよい面もあって豊かな地域性があることを紹介しました。二つ目には、こうした課題に取り組むため学校教育がどのような役割を果たせるかを考えるとともに、三つ目に生涯学習の観点から異校種連携を積極的に進めることの重要性やこれからの大学が担うべき地域貢献などの役割について説明がなされました。

経済や物質面での成長発達に陰りが感じられる昨今、地域住民がもう一度自らの生活環境を見直すことで新たな地域社会と豊かな子どもの成長を追求することができるという大変前向きな内容の講演でした。

編集後記

平成25年度は、県内では国民文化祭や富士山の世界文化遺産登録など、記憶に残ることがたくさんありました。記録的な大雪の被害も忘れられません。一方で、大人が子どもたちを取り巻く環境に対して、もっともっと配慮していくことの必要性を感じた一年でもあったような気がします。この『かけはし』は果たしてお役に立てたでしょうか。新年度も地域の「架け橋」となるよう精一杯取り組みたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。